Book reviews

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00053411

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

新刊紹介

○ 瀬戸　剛（監修）辻本善次（編著）：**シダの魅力 －大和のシダを楽しもう－**　A 5 判，140 頁．2006 年 10 月 20 日．奈良シダの会．1,715 円.

シダに関する知識が一通り身に付くように書かれており，野外でシダを観察する手助けとなる本である。

本書は，　巻頭部に奈良県産シダ植物（生態）カラー写真 10 頁，奈良県産シダ植物（標本）白黒写真 16 頁があり，第 1 章　シダ植物の話，第 2 章　すぐ見分けられるシダ，第 3 章　身近なシダの見分け方，第 4 章　シダらしくないシダ，第 5 章　シダ植物の生育と環境からなり，巻末に資料　奈良県産シダ植物和名目録，参考文献，和名索引からなる。ティーブレイクとして，シダ植物と羊歯植物，食べられるシダ，シダの和名など 19 の話題がある。その中にある，シダの語源がシダレル（下垂る）物から由来したこと，磐姫皇后（いわのひめおおきさき）の御綱柏（みつながしわ）はオオタニワタリである，などは面白い。

葉形，葉質，鱗片，葉身の切れこみ，内先，外先などの羽片の出方，胞子のう群，胞子のう，包膜，胞子の形などの説明があり，ワラビ，ゼンマイ，ウラジロなど身近なシダについては詳しく説明されている。分類の難しいキジノオシダ類，カナワラビ類，ヤブソテツ類，イノデ類，イタチシダ類は，区別点と生育場所，外観，および見分け方のポイントで詳しく書かれている。

文字も大きく，たくさんの写真と描画があり，読みやすく，シダ植物の入門書としては非常に良くできた本である。

購入希望者は，著者の辻本善次氏（〒630-0131　奈良県生駒市上町 1047-1 TEL・FAX 0743-79-3218）に申し込まれるとよい。（鳴橋直弘）

○ 岸　勝美・入澤清治：**細辛寒葵**　A 4 判，512 頁．2008 年 11 月 11 日．栃の葉書房．16,000 円（税・送料込）.

本書はサイシンとカンアオイの園芸品種を主とした総合書である。

本は，推薦文，序文，沿革，分類，用語解説，細辛，図・青茎斑物，斑物沿革，斑物カンアオイ＋基本種，基本種，栽培，やぶにらみカンアオイ考，カンアオイとギフチョウ類について，和の庭造り（ガーデニング），方言，協力者，愛好団体・園芸業者，参考・引用文献リスト，総索引，後述からなる。また，本編中に 7 つのコラムが挿入されている。

150 種のサイシンの園芸品種，約 500 種のカンアオイの園芸品種が出ているという。野生種は，107 分類群と 7 自然雑種が掲載されている。それぞれの分類群ごとに，和名，学名（文献），花期，希に類似品との区別点のノートがあり，葉と花の写真，分布図，特徴・葉（形態的記載と写真），特徴・花（形態的記載と写真）の順に記述されている。さらに，葉と花は変異が分かるように，数枚の写真からなる。

アマミカンアオイ，アリアケカンアオイ，コバノカンアオイ，キノカワカンアオイ，ハガクレカンアオイ等，30 弱の植物には学名が付いていない。これは，著者らが園芸畑の人だからとも考えられるが，一方では，分類学的研究の遅れていることが原因とも考えられる。

フタバアオイは徳川家の紋章として使用され，多くの本草書にも登場する。この本には，今までに出されたすべての銘鑑が収録されているという。栽培方法や繁殖のやり方などは役に立つ。江戸時代から現代まで，多種多様に“芸”をしたサイシンとカンアオイを余すところなく披露してくれるハードカバーでケース入りの豪華本である。

購入希望者は，書店販売はないので，直接，栃の葉書房　営業部（TEL 0289-65-3311 FAX 0289-65-1694 E-mail info@tochinoha-shobo.com）に申し込まれるとよい。（鳴橋直弘）

○ 大原隆明：**サクラ　ハンドブック**　新書判，88 頁．2009 年 3 月 1 日．文一総合出版．1,200 円.

本書は，サクラのハンディなミニ図鑑である。

本は，本書の見方，本書の特色と使い方，サクラとは，自生のサクラと栽培されるサクラ，サクラの各部位の名称・用語，サクラを見分けるポイント〈花〉，サクラを見分けるポイント〈葉〉，野生のサクラ，栽培品／早咲き，栽培品／同時期，栽培品／遅咲き，栽培品／二季咲き，日本全国桜名所，索引からなっている。

日本に野生する 11 種と栽培品 52 種類が選ばれ，それぞれの種類ごとに，開花時の枝，花の正面と裏面（萼片），萼筒，小花柄，苞，葉，鋸歯，葉柄の写真がある。これらは，サクラの種類の同定のためには重要な形質である。栽培種は種類数も多く，同定するのが難しい。ソメイヨシノは全国的に植栽されているので，この植物と開花期を比較し，この植物よりも早く開花する早咲き群，同時期に開花する同時期群，遅く咲く遅咲き

群，春と秋に咲く二季咲き群に分けて，同定し易くしたのは，素人にはわかりやすく，便利な本となっている。

サクラを勉強したいと思った人は，この本を持って，サクラの開花時に現場に行き，花を観察し，どの植物かをこの本から探し，その後，葉が十分に展開した時に，葉を観察し，自分の同定したサクラであったかを確認する。これを数年繰り返せば，サクラ通になれること，請け合います。

サクラには雑種が多く，分類が困難である。バラ科によく見られることであるが，サクラでも，雑種において，両親種の DNA が半分ずつ入った雑種ではないものがあり，その結果雑種は中間の形態の植物でないことがある。これを形態だけから解決するのは困難なことではあるが，野生種の形態をしっかりと頭に入れておくことは，雑種の理解につながる重要なことであるのは言うまでもない。この本は，野生種を理解する上で参考となる最もシンプルな本である。（鳴橋直弘）

○ 高知県・財団法人高知県牧野記念財団（編）：**高知県植物誌**　A 4 判，プレート 2＋844 頁，37 図版，付録 DVD. 2009 年 3 月 15 日．高知県・財団法人高知県牧野記念財団．8,400 円（税込）.

本書は，書名通りの高知県の植物誌である。

本は，巻頭部に，海岸，汽水域，里地，丘陵・低山，山地，石灰岩地，蛇紋岩地の植生や植物のカラー口絵写真があり，目次の次の本編は高知県の自然環境と高知県の植物相（1～667 頁）で，巻末部に引用文献，高知県産植物の開花結実と垂直分布，高知県産植物の市町村別分布，協力者一覧，編集・執筆・写真提供者一覧で，最後はおわりにと索引からなる。

この植物誌の中で，見出し項目として採用された植物は，198 科 1,027 属 3,170 分類群という。これらの植物には，分類群ごとに，和名，学名，ノート，文献，標本，および高知県での分布図が出ている。

本は，A 4 判で使用されているフォントや活字の大きさは手頃で，非常に見やすく読みやすい。ただ，具備されている分布図が小さいのは残念である。植物の学名の次にあるノートは，あったりなかったりで，内容も雑多で統一が見られない。パソコンを使用して付録の DVD で植物を検索すると，標本写真の画像は鮮明で植物の様子がよく分かる。拡大すると，花や果実もビノキュラーで見ているようである。この DVD は利用価値が大である。

当学会が 2002 年 12 月に『植物地理・分類研究』創刊 50 周年記念号（第 50 巻第 2 号）を出版したときに，特集として“各都道府県別の植物自然史研究の現状”を取り上げた。その中の高知県の項で鴻上　泰氏は，2010 年の高知県植物誌編纂完成を目指して調査を開始したと書いている。実際に植物誌は 2009 年に完成したのだから，予定よりも早くできたことになる。それは，植物誌編纂委員会と事務局およびボランティアの方々の努力の賜物だと思われる。黒潮が当たる高知県は温暖で雨が多く，高山はないが 2,000 m 級の山がたくさんあり，石灰岩や蛇紋岩という特殊な岩石地帯もある。都市化で宅地になった場所も他県に比べ少なく，広い面積のほとんどが森林で覆われている。だから，高知県は植物の種類の豊富な県である。この植物誌を纏め上梓することは大変なことである。植物誌本体の正味 635 頁は同じタッチで記載されている。植物群のほとんどの著者は小林史郎氏であり，彼の能力の高さと忍耐強さに驚かされる。高知県の植物研究の土台となる良い本である。

購入希望者は，牧野植物園　牧野ミュージアムショップ（〒781-8125　高知県高知市五台山 4200-6　TEL 088-878-1181 http : //www.byca-auren.com/product/172）に申し込まれるとよい。（鳴橋直弘）

○ 石川真一・清水義彦・大森威宏・増田和明・柴宮朋和：**ブックレット群馬大学⑤ 外来植物の脅威－群馬県における分布・生態・諸影響と防除方法－**　A 5 判，70 頁．2009 年 4 月 10 日．上毛新聞社．934 円.

生物多様性喪失の要因として近年問題になっている外来植物について，群馬県の県内分布状況，生態特性，諸影響，防除上の留意点を簡潔にまとめたものである。県の委託により群馬大学と群馬県自然環境調査研究会が実施した外来生物調査（2008 年に報告書発行）に基づいている。第 1 章は環境省指定の特定外来種 7 種（アレチウリ，オオフサモ，オオカワヂシャ，オオキンケイギク，ミズヒマワリ，オオハンゴンソウ，ボタンウキクサ），第 2 章はハリエンジュなどの要注意外来種 9 種，第 3 章はタカサゴユリなどの「県内危険外来種」11 種（科），合計 27 種（科）が取り上げられており，植物体や生育状況のカラー写真があるので一般にもわかりやすい。これらは群馬県で生育が確認されたものに限定されているが，他県でも同様に生育している，または侵入の可能性があるものである。防除の留意点には効果的な防除法が紹介されているので，外来植物を防除しようとする人に良い手引きとなる。価格も手頃である。

なお，注意が必要なのは，特定外来植物を駆除する際，抜き取った株を処分するため持ち去ることは「個体

の移動」に該当するため環境大臣の許可が必要となることである。これは本書の序章でも指摘されているように法律施行上の不備で，合法的には抜き取ってその場に放置して枯死させるしかない。群馬県をはじめ宮城，福島，山形，埼玉，千葉（一部），東京，神奈川（一部），長野，岐阜，滋賀，京都，兵庫（一部）の各都府県では自治体レベルで環境省から防除の確認または認定を受けているので，これらの都府県でオオキンケイギクやオオカワヂシャなどの駆除活動を行う際には担当課に相談するとよい。 （中田政司）

○ 日光自然博物館：**日光の花 325** A 6 判，368 頁．2009 年 4 月 20 日．日光自然博物館．1,000 円（税込）．

日光に生育する植物のハンディ図鑑である。

本書は，本書の使い方，赤色系の花，黄色系の花，紫色系の花，白色系の花，色分けしない植物，主な地名，用語集，観察の記録，参考文献，さくいん，からなる。他にコラムが 5 頁ある。

日光には約 1,500 種の植物が見られるというが，そのうちの 325 種が選ばれている。1 種に 1 頁が割り当てられ，それぞれの植物毎に，カラー写真，解説文（生育地や形態的特徴），花期，分布，記録（日光で見られる場所）がある。

この図鑑の特徴は，“花の色で引く”点である。誰が見ても赤い花とか，紫の花とかは，分かり易いが，ピンク色の花は，その程度によって赤色系のところなのか，白色系のところなのか，読者には迷うところもある。今後は搭載されていないが良く見られる植物の追加と，日本語の分からない人への学名の追加をお願いしたい。

この本は手のひらサイズ（14.8×10.5 cm）で，きれいで，値段も安く，日光の植物に興味を持たれる人には打って付けの図鑑である。このような図鑑が，地方の山，ハイキングコース，森林浴地，景勝地，観光地等毎にあれば，一般の人の中から植物に興味を持つ人が増えるだろう。

購入希望者は，株式会社日光自然博物館（〒321-1661 栃木県日光市中宮祠 2480-1 Tel. 0288-55-0880 http : //www.nikko-nsm.co.jp）へ申し込まれるとよい。 （鳴橋直弘）

○ 小泉武栄：**日本の山と高山植物** 新書判，238 頁．2009 年 9 月 15 日．平凡社．760 円．

本書は，世界的な視野から見た，日本の山の成り立ちとそこに生育する高山植物について，地形・地質・植物群落の関係をつながりとして論じている。

本は，第 1 章 世界の中の日本の山，第 2 章 高山植物の分布と生活，第 3 章 日本の高山植物の起源，第 4 章 ヨーロッパアルプスにはなぜハイマツ帯がないのか，第 5 章 高山の地質・地形と植物群落，第 6 章 岩塊斜面はいつできたのか，第 7 章 地質の成り立ちとプレートテクトニクス，第 8 章 山の成り立ちと山地の地形，第 9 章 氷河時代とその影響，第 10 章 火山と火山活動がつくり出す植物群落，第 11 章 特異な植生分布，の章からなる。

“我が国の山脈は 100～200 万年ほど前から急激に隆起してきた”，“日本海側の雪の量が現在のようになったのは 8,000 年ほど前からだ”，“日本アルプスや大雪山に高山植物が分布しているのは，本当は不思議なことである”，“日本の高山がもし現在のように強風・多雪でなかったとすれば，高山帯はハイマツでおおわれ，高山植物の群落はなくなっていたにちがいない”，と著者はいう。山の成り立ちの違いや浸食の状態の違いが，表層の岩屑の大きさの違いとなり，その結果，山の斜面上の岩屑の移動性や安定度，水分条件の違いとなり，これが植物群落の違いとなって現れるという。

高山に登ると，稜線の左右で植物が全く違うことや雪渓近くとそうでないところで植物が違うことに驚かされる。同じ尾根でも隣接する山で植物が違うこともある。これらの違いについて，風や雪という条件だけで考えるのではなく，山の成り立ちから考えていこうとすることは，重要なことである。この本は，高山植物に対する見る目を教えてくれる面白い本である。 （鳴橋直弘）